

聖書：コリント人への手紙第二 12：11～21

説教題：あなたがたが成長するため

日時：2025年3月23日（朝拝）

パウロは 11 章から愚か者となって自分を誇る話をして来ました。本来クリスチャンにとって自分を誇るというのにはあり得ないこと、考えられないことです。「誇る者はただ主を誇れ」がモットーです。そんなパウロが自分を誇る話をして来たのは、そうでもしないとコリント人たちを取り戻せなかったからです。それが 11 節の意味です。パウロがコリント教会を開拓した後にコリントに入って来た偽使徒・偽教師たちは自分たちを誇る人たちでした。彼らは自分たちが強い人間であること、外見が立派であること、高い地位を持っていること、成功している人間であること、雄弁であることなどを誇りました。一言で言えばエリートであると自慢していました。それに比べてパウロは弱々しく、苦難の中にあり、その話しぶりは大したことがないと言って、彼らは批判していました。だからあんな彼は尊敬に値しない、神によって立てられた使徒ではないと。それを聞いてコリント人たちは本来、いやそれは違う！と言うべきでした。「パウロは神によって立てられた使徒である。我々は彼を信頼している」と擁護・推薦すべきでした。しかし彼らはそうしませんでした。後からやって来た偽教師たちの方が強く立派に見えて魅力的。当時のギリシャ文化の中で一般的にも認められそうなリーダーたちである。そう思ってコリント教会のクリスチャンは流されつつありました。そのため、パウロは愚かなことだと断りつつ、偽教師たちと同じ土俵に上がって自らを誇るようなことをこれまで語って来たのです。

「私は、たとえ取るに足りない者であっても」とパウロは言います。I コリント 15 章 9 節で「私は使徒の中では最も小さい者であり」と語っていた通り、パウロは自ら取るに足りない者であることを認めるにやぶさかではありませんが、あの大使徒たち・偽教師たちに劣るところはないと言います。自分が使徒であることのしるしはコリント人たちの間でなされたしるしと不思議と力あるわざに示されていると言います。この「しるし」と「不思議」と「力あるわざ」の三つはしばしば聖書でセットで出て来て、全体として証拠としての奇跡的なわざを指します。使徒の働き 2 章 22 節にもイエス様のわざについて「力あるわざ」「不思議」「しるし」の三つがセット出て来ています。一見パウロは、私はこれこれのことをして見せた！と自分を誇っているようにも思えます。しかしここは原文では受身形で表現されています。新改訳 2017 は

「私は・・明らかにしました」とパウロを主語にして訳していますが、原文の主語は「使徒としてのしるしは」です。この使徒としてのしるしが、あなたがたの間でしるしと不思議と力あるわざの内に行われたと表現されています。この「行われた」というのもいわゆる神の受動態です。つまりこれは神がなさったことです。パウロが自分の好きな時にこれらの奇跡を行ったわけではありません。神がこれらの奇跡を通してパウロが使徒であることを証明されたのです。そしてこれはあらゆる忍耐の内で行われたことでした。「忍耐を尽くして」とありますが、これはパウロの働きが多くの忍耐を必要とする困難や逆境の中で行われたことを示しています。前回見た 12 章 10 節に「キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます」とありましたが、まさにそういう状況のことです。偽教師たちはパウロがこのような中にあることを見下していました。我々はそんな苦しみとは関係のないハッピーな状態、祝福の状態にあると誇っていました。これが彼らのいわゆる勝利主義です。しかしパウロは本当の使徒のしるしは苦難の中に自分があることだと述べて来ました。ですから 11 章 23 節以降で使徒として受けた様々な苦しみが列挙されました。そういう苦難や忍耐のただ中で、神のわざとしての奇跡がパウロを通してなされました。それは彼が神の使徒であることを示す独特なしるしでした。それは彼を通して語られる神の言葉にこそ聞くようにと人々を導くためのものであり、使徒たちによる文書が結集されて聖書が完結した今日は不要のものと言えます。今日の私たちは聖書に聞けば良いのです。その聖書に耳を傾けず、今日も奇跡的なことを求めてさまよい歩くことは本末転倒的なことと言わざるを得ません。しかし使徒たちの働きがなされていた当時は、このようなしるしがありました。当時の人々はこれらを見てパウロたちを認めるべきでした。使徒の働きにはこれに類するいくつかの記録があります。使徒の働き 14 章 8～10 節にはリステラでパウロが足の不自由な人を癒やした記事が出て来ます。16 章 16～18 節にはピリピで占いの霊につかれた女奴隷を、その霊から解放した出来事が記されています。使徒の働き 18 章のコリント滞在時の記録にはこれに相当することが記されていませんが、実際にはあったのでしょう。コリント人たちはそれを見たのに、後からやって来た偽教師たちの方に惹かれてしまったのです。ですからパウロはコリント人たちを取り戻すため、偽教師たちと競うかのようにして愚か者を演じざるを得なかったのです。

コリント人はこのようにパウロの使徒としてのしるしを見る機会に恵まれていました。もし諸教会に比べて劣っている点があるとすれば、それはパウロが彼らに負担

をかけなかったことだと彼は言います。すなわち経済的に支えてもらわなかったことです。本来福音の働き手は宣教の働きを通してその生活が支えられるべきです。それが先の手紙9章でパウロが語った通り、主の御心です。しかしパウロはコリント教会から受けることは良くないと考えて受け取りませんでした。そのことを赦してほしいと言います。これはある意味で皮肉です。本当はコリント人たちの方が赦してほしいと言うべきです。彼らが正しい状態になかったため、パウロは彼らから受け取りませんでした。この結果、彼らはパウロに厳しい生活を強いたのです。しかしこれはパウロ自らが選んだ道です。ですからこの不正のことは赦してください、と言います。この不正とは正しいあり方ではないこと、本来的なあり方ではなかったということでしょう。

14節以降でパウロは、これから3度目の訪問をすることについて述べます。1回目は最初のコリント宣教時、2回目は突如行って残念な結果に終わった悲しみの訪問のことです。そして今回は3回目です。パウロは今回も彼らからの献金は受け取らない旨を述べます。求めているのは彼らからの支援ではなく、彼ら自身であるとパウロは言います。「子が親のために蓄える必要はなく、親が子のために蓄えるべきです」と彼は言います。パウロは霊的親として霊的子どもであるコリント人のためにむしろ与えたいと思っています。15節に「私は、あなたがたのたましいのために、大いに喜んで財を費やし、自分自身を使い尽くしましょう」とありますが、ここでの「財を費やす」とはパウロがお金をささげるという意味ではありません。これは本来はコリント人を通してパウロの宣教活動は支えられるべきなのに、パウロは自活して福音宣教の働きをしたという意味です。そういう意味で自分の財を費やしたのです。そればかりか命までも使い尽くす用意があると述べます。彼らを愛し、彼らに仕えたいという気持ちに限界はないのです。なのに「私があなたがたを愛すれば愛するほど、私はますます愛されなくなるのでしょうか」と彼は言います。パウロがこのような思いで仕えているのに、コリント人には逆に受け取られてしまっていた現状があったのです。

16節を見るとパウロはだまし取ったと批判されていたようです。すでに8~9章で見て来ましたが、パウロはエルサレムの貧しい聖徒たちのための援助献金プロジェクトを推進していました。そこである人たちは、特に偽教師たちは、パウロは個人的には献金を受け取らないというパフォーマンスをしながら陰ではこの援助献金からくすしている。そこから奪い取っていると非難していたようです。憶測でこんなこと

を言う人たちもいたのです。それに対してパウロは、私が遣わした人たちを見るならそうでないことは分かるはずではないかと述べます。具体的にテトスの名があげられます。彼は先の涙ながらに書いた手紙をコリンへ持ち運び、立派な働きをした人です。7章15節で見た通り、コリント人たちはテトスを感謝して、恐れおののきながら彼を迎えました。そして今回のこの手紙もテトスが一足先にコリント教会へ持って行きます。その彼はあなたがたをだますことがあったでしょうか？とパウロは問います。彼も私とグルになって何か悪事を働いたでしょうか。あなたがたから奪い取ろうとしたでしょうかと問います。それはあり得ないことです。その彼はパウロと同じ心で、同じ歩みをしている人です。つまり一部でなされていた批判はあらぬ中傷だったのです。そんな言葉に乗せられるべきではないのに、ある人たちはパウロを批判する偽教師たちの言葉に同調していました。

最後19節以降で「あなたがたは、私たちがあなたがたに対して自己弁護をしているのだと、前からずっと思っていましたか」とパウロは問います。一見この手紙はパウロの自己弁護の書と読めます。ある意味ではそうです。しかしそれは決して彼の個人的名誉回復のためではありません。彼は第一コリント4章1～5節で、人間にどう評価されるかは私にとって非常に小さなことだと言いました。大事なのはやがての日の主の評価であると。ですから自己弁護によってコリント教会からの良い評価を得たいという動機はパウロにはありません。彼がこれまでずっと語って来たことすべては「あなたがたが成長するためなのです」とパウロは言います。この「成長する」という言葉は、しばしば聖書に出て来る言葉で、「家を建てる」という意味の言葉です。相手の人という家が建て上げられること、その成長と益に仕えること。そして特に教会が神の家としてふさわしく建て上げられることを意味します。すべてはコリントのクリスチャンとその教会が建て上げられ、成長することをひたすら願ってなされて来たことだったのです。

そんなコリント教会を思うパウロの心配が20～21節にあります。「そちらに行ってみると、あなたがたは私が期待したような人たちでなく、私もあなたがたが期待したような者でなかった、ということにならないでしょうか。」さらに「争い、ねたみ、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱」といった悪徳が満ち溢れていることはないでしょうか。「私が再びそちらに行くとき、私の神があなたがたの前で、私を恥じ入らせるのではないのでしょうか。」福音を伝えても何らふさわしい実が結ばれなけれ

ばパウロが神の前で恥じ入らされる結果となるだけです。「そして、以前に罪を犯していながら、犯した汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たちのことを、私は嘆くことにならないでしょうか。」パウロは決して、私はすることをしたから、その結果あなたがたがどんな状態にあらうとそれは私の知ったことではないといった態度を取りませんでした。彼らのことを我がこととして心にかけ、心配し、苦しみ、うめきつつとりなしているパウロの姿がここにあります。

以上の箇所を読んで思わされることはコリント教会に対するパウロの並々ならぬ献身ではないでしょうか。自分の名誉は後回しで、ひたすら彼らの益と成長のために自らをささげ、使い果たそうとしている彼の姿が示されています。このように献身して仕える人があってこそキリストの教会の歩みは守られ、支えられ、その成長が導かれて行ったことを思います。そしてこのような労苦や犠牲を通して教会が建て上げられ、神の働きが前進して行くというのが神の御心であることをも思います。このパウロの姿は明らかにイエス様を映し出すものです。教会は何よりもイエス様の十字架の犠牲と代償と執り成しを通して打ち建てられました。その教会はその後もイエス様の足跡に従って労苦と苦難の内に仕える人々を用いて、その歩みが導かれ、祝福されて行きます。これは偽教師たちのスタンスと全く異なる点です。彼らは先に触れた通り、苦難を軽蔑していました。なるべく苦しいことには関わりたくないとします。苦しいことに関わるのは負け組のすることだと思っています。苦しみとは無縁のいい生活をするのが祝福だと思っています。我々はこうして勝利の内にある！我々の人生は成功しており、祝福されている！と彼らは誇っていました。しかしパウロが進んだのは十字架へと進まれた主に倣う歩みでした。その苦難や弱さの中で、主がくださる十分な恵みを受け、「私は弱いときにこそ、私は強い」という 12 章 10 節の祝福に生かされ、奉仕していました。

今日の私たちの教会についてもそれは同じでしょう。このパウロに続いて、そこにいる一人一人のために、その教会の建て上げのために心と体を献げて仕えてくださった多くの奉仕者、しもべたちの労苦と犠牲によって教会の歩みは導かれ、祝福されて来ました。そんな中、私たちはコリント人のようであることはないでしょうか。偽教師たちのようなかき回す人たちに同調していい加減なことを言ったり、無責任な言動を取ったり、労苦している人を悲しませるような振る舞いをしたことはないでしょうか。そうならないように。むしろこの箇所のパウロに続く人々によって教会は建て上

げられ、祝福されて来たことを思って感謝したいと思います。そして私たち自身もその後続く者たちでありたいと思います。今日の箇所のパウロに倣い、また私たちの教会のために同じように仕えてくれた方々・今も仕えてくれている兄弟姉妹に倣い、そして何よりもその先頭におられるイエス様のお姿に倣い、そこにいる一人一人と教会の成長と建て上げのために自らもその心と体を献げて仕える者であるようにと。そこには確かに苦難があるでしょう。労苦があるでしょう。しかしそれが神の方法です。そこで「わたしの恵みは十分である」と言われる主により頼むことによって、弱さの内に現れる神の力をいただいて奉仕させていただくことができます。その恵みと力をいただいて教会の建て上げと完成のための一翼を担う者とされ、やがての日に、そのために貢献し、良く仕えた者として、主からの賞賛を受けつつ御国に入る者とされる光栄と喜びに生かされて行きたいと願います。